

目的 ヒトの健康増進に役立つ資料を得るため、成長期における中学生生徒の着衣状態を把握したく、今回は制服という限られた範囲内における衣服の実態調査を行ない、若干の成績を得たので報告する。

方法 本調査は1978年、阪神間に居住する中学生136名について実施し、第1報に引続き秋季の調査結果もあわせ、年間の集計を行ない種々検索した。

結果 制服着用における本調査においては、体表面積に対する衣服重量は、春・夏季は女子が男子よりも大であり、秋・冬季は男子が女子よりも大である。衣服重量は制服に大きく左右され、個人差はあまり認められない。衣服重量の性差も男女の制服の相違による重量差のためと考えられる。年間を通じ女子が男子よりも大であり、衣服腰重量は、男子は年間にわたりほぼ同量であるに比し、女子は夏季においては他の季節よりも大である。また肩と腰にかかる重量は、男子は比較的分散してかかっているが、女子は肩重量が腰重量よりも大で、特に秋・冬季にこの傾向が著しい。衣服着用枚数については、四季を通じ躯幹部が四肢部よりも多く、四肢部では上肢部が下肢部よりも多い。下肢部の着用枚数は年間を通じほぼ一定で、保温のための着衣調節は、材質による保温力の差はあっても、主として上半身の衣服によるものと考えられる。躯幹部および大腿部においては、女子は男子に比較してやや多く、下着の種類も組み合わせも多種多様である。寒暑感覚は室温と大きな関係をもち、個人の着衣状態によっても可成り異なる。また衣服重量および着用枚数の厚薄との関係も勘案し、本調査における制服着用の体温調節について検討し報告する。